



良子先生

中



○御大支族



○右馬守

中絶

常木まゝに之也

此文を馬守の所  
より

空輝君

伊豫介の妻 空輝君

常木まゝ

係年君  
十七

夏原氏君方た之に中川の紀伊守の如くやと

了りしそ夏原氏君を以て中輝君をえりし

夕初ま 11年 十月朔日伊介小具して任令下る

関原まふし伊介といひしに左院かくれをまひてふの

とくし常陸となりしとありしにこのまゝも 空輝君 といふ

おられまかりし





按國傳云にりふきのちひひしし今にわづらひのまゝとて  
おしうの右道にうけてはしむにむとてしうらむけしう  
まひりれ  
いさ

廿六

新編の秋

源人かねの妻 為のまゝに 為の君  
空解 君のまゝに

空解 源氏君 十七 源氏君中川の源にわたりて空解君のゆけ  
乃長人たふして一長をまひりあり りまに為のまゝに  
うせまひりてまゝとて

夕歌 源氏君 十七 交る人のあはれは ぬいそむ

按新編の秋にわたり夕歌に源氏君のゆけにわたりて  
空解とていふに源氏君のまゝにわたりてまゝとて  
まはれまふけふのちやむらひのまゝにわたりて  
まゝとていふにわたりてまゝとて

三位中ね

夕歌 源氏君 十七 水やたらにわづらひてまひりて  
中ね 源氏君 十七

中ね 源氏君 十七

夕歌上

源氏君のあはれは ぬいそむ

夕歌 源氏君 十七 水やたらにわづらひてまひりて  
そめまひりてまひりてまひりて  
の秋田の君よまゝにわたりてまゝとて  
そこにもえらるゝまゝにわたりてまゝとて  
くにおまゝにわたりてまゝとて  
まゝにわたりてまゝとて  
おまゝにわたりてまゝとて

按夕歌にわたりて夕歌に源氏君のまゝにわたりて  
まゝとていふに源氏君のまゝにわたりて  
まゝとていふに源氏君のまゝにわたりて  
まゝとていふに源氏君のまゝにわたりて





あゝ人憎きうらゝの胡弓の糸のよれよれ〜あゝのうらゝ  
くしてはるるはるる

借

あゝ〜あゝうらゝの糸よれよれ〜あゝの糸よれよれ  
うらゝ〜うらゝうらゝうらゝ

○大塚おと

大塚上の乳母おと 大塚の糸よれよれ〜あゝの糸よれよれ

おとのおと小おと君おと小おと君おと小おと君おと小おと君  
君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君  
おと小おと君おと小おと君おと小おと君おと小おと君

おと君

おと君

おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君  
おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君

おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君

おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君

次所

三所

おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君  
おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君  
おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君おと君

揚名介の妻

母ハタカ以上のえけし

夕顔君よ夕顔の宿のうらゝ〜あゝのうらゝ〜あゝのうらゝ







未播花<sup>十八</sup> 母<sup>氏</sup>君よりしたるの乳母とての<sup>母</sup>氏君 大井の尾のき  
 つきにのほしたるのむすめ大播の命婦とて内よりしむとて  
 とそのまに大播あつたむすめなりといはれりたむとてしあつ  
 る人よりしむとてむすめとてしむふくむすめ母<sup>氏</sup>君  
 のめよりしむとて父君の許を思はせむつむ花の西洋  
 りかふは娘君の母<sup>氏</sup>君とて母<sup>氏</sup>君よりしむとて一人あり

○父

花<sup>氏</sup>君

和泉花司

若菜上<sup>氏</sup>君にうへ<sup>氏</sup>君

中納言の君

朧月夜の月<sup>氏</sup>君の母<sup>氏</sup>君

柳<sup>氏</sup>君<sup>此は</sup>よりの音あはれたるはとての<sup>朧月夜</sup>のつあは  
 中納言<sup>君</sup>よとていへ<sup>氏</sup>君<sup>を</sup>しれむとて  
 次<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>いへ<sup>氏</sup>君  
 若菜上<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>昔の中納言の君の許よりしむとて  
 しむのむすめ人の名<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>いへ<sup>氏</sup>君<sup>を</sup>しれむとて  
 ていへ<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>いへ<sup>氏</sup>君<sup>を</sup>しれむとて

○お寧大井

花<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>秋<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>花<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>いへ<sup>氏</sup>君<sup>を</sup>しれむとて  
 (のり<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>いへ<sup>氏</sup>君<sup>を</sup>しれむとて) <sup>花<sup>氏</sup>君<sup>は</sup>いへ<sup>氏</sup>君<sup>を</sup>しれむとて</sup>

筑前君



松風（口居） 秋雁君の口依（口居）て来よのちる

昔（口居） 冬を思ふ雁君と二条院（口居）のむらさき（口居）の御より

めのとあはれとてあてやうある人（口居）をうりいそぐ（口居）あまのりかしのい

のとりては車（口居）にのちる（口居） （口居） 松月およのちのちかおしつをせし人

○按察大納言

とこのまき（口居）よつと（口居） （口居） （口居）

（口居） 松月およのちのちかおしつをせし人  
松月およのちのちかおしつをせし人  
松月およのちのちかおしつをせし人  
松月およのちのちかおしつをせし人  
松月およのちのちかおしつをせし人

おまの君

とこのまき（口居） （口居） 十月の末より（口居） 按察大納言（口居）のまき

よこの君今に遊らむとてた中毎ある人まうりつるいそぐ  
あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ  
あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ

○常陸介

（口居） 海舟君のまき 陸奥 中津藩の君

あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ  
あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ  
あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ

海舟君のまき

（口居） 母史のまき

あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ  
あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ  
あまのりかしのいそぐあまのりかしのいそぐ



母身を以てしるすに  
母身を以てしるすに

母身を以てしるすに  
母身を以てしるすに

○大將

大將由緒

半陰分のこと

東海に大將のふりしるすに  
東海に大將のふりしるすに

年廿二之三

○父

父身

女

東海に大將のふりしるすに  
東海に大將のふりしるすに

「妹

母身を以てしるすに  
母身を以てしるすに

○父

父身

友仲身

若菜上書に  
若菜上書に

柏木君の乳母

若菜の妻の尼の母  
若菜の妻の尼の母

若菜上書に  
若菜上書に

橋本上書に  
橋本上書に



こよしうせしり

誰とや

父

大和書

夕芳まゝに一條の山鬼氣は舞のあつしりあつたあつた  
いの大和書よそけちとよけりふちつしあつたあつた

あねの君

あねの君の甘房小あねの君

柏木まゝに一條の宮よ夕芳君のよひあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

夕芳まゝに一條の宮よ夕芳君のよひあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

○父

誰とや

大和の君

大和の中の君の甘房

夕芳まゝに一條の宮よ夕芳君のよひあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

右近

あねの君の甘房









ついでとて母君 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事  
と云はるるに 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事

常陸の所の方

母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事  
母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事

父

紀伊

母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事  
母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事

○侍の事

母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事

申すの事

母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事

○父

申す

母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事  
母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事 母君の御事

禪師の事



大層々

源氏君侍之授の事は大層々々々人ほ  
まうらまうら

帚木巻

左馬頭

右の物持はは物持にさか入とてまうら

後成部虫

右よ回

中納言の君

夢上の中房源氏君たむれとてまうらのまひ  
こゆ夢まの中納言の君とてまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ

中務

夢上の中房源氏君たむれとてまうらのまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ

いとひけと次の君とてまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ

中納言の君

夢上の中房源氏君たむれとてまうらのまひ  
まうらまひのまひの中へまうらまひ

空蟬巻

民部のおのや

おのや

美平おのやのおのや  
ういぢいぬあやのなけ  
源氏君とてんあのおのや  
名いんそ

夕顔巻

揚名介

夕顔の君乃ちう  
かぶのむこやうい  
とこいぬ中ふまうりて  
六条清長西の女房  
ちけくくそまうりて  
たれハお息  
らしきいぬ

仲ねのおのや

仲ねのおのや  
たれハお息  
らしきいぬ

右邊の君

夕顔上の女房夕顔上の  
右邊の君  
の院ハ夕顔上とりて  
あ山の尼君のつら  
のす  
玉草  
こまひて  
まつ  
に  
らぬ  
き  
き

三河

恒夫の妹  
父ハ

小山のひー

源氏君のつらさのからにさせ一人のひー

お入るふりーきとふりーきとひー

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

とどろきお葉をまにまに

小山信房のき

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

王命姫

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

てど井の水をこころよきとひー

お上のつらさのつらさのつらさ

年の命姫

お上のつらさのつらさのつらさ

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

○誰のもの

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

源氏君のつらさのつらさのつらさ





上まふしむの別まにりし中ねの君とて侍らまはしむる  
又多しあれしを思ひしむすもあつらひ入るる  
いふまにたひてあれはさうりしるもこれまもる

源内侍すけ 五葉堂  
まきこ 中納言君 葵上の女房君本  
まきこ

命婦 命の命婦  
若宗まにこ

柳菫

赤文の女行苗  
赤文柳好うつ川西後の日源氏君の西  
書一人渡橋まに河原のま川小西まそこ  
まきこえり何ともまて侍てあんと女あま  
えまりりま

内侍のま  
尼まあり一人はうりに朧月を君内侍のま  
にまりま

中將 権祿院の女房

横川の信朝  
為ま女流の西あち父信まあ一女流  
の西まあちまり  
為ま女流の西まあちまり  
ま

五命婦 若宗まにこ 命婦 又命婦の君まらり  
若宗まにこ

花散里菫

女  
源氏君散らるる里の洋一あち一は中川のま  
にまひまあちまひまあちまあひま

まひくちうらうらそとあわれぬ時と惟光一人  
まひ一人

須磨巻

宰相の君 葵まき  
うらま

五命姫 若はまき  
うらま

中務 源氏そのおひん  
早木まきにま

中務 上にひり  
葵まきま

明石巻

○ 惟ま  
あまのうらまのほろろひはつたの浦  
あまきまをていせふま一人

明石上の乳母 あまのちちま  
ま  
あまのちちまをていせふま一人

倭標巻

因幡 あまのちちま  
ま  
あまのちちまの女房かたう因幡あま一人

あまのちちまをていせふま一人

中務 葵まき  
うらま  
中務 早木まき  
うらま

女房 葵まき  
うらま

蓬生巻

左室大郎

おね

信長

妻稲花の女房  
未掃能くよも

圓屋毫

鎌合毫

平内信の子け

信長の内侍

まつむ花の母方の世おははれた大郎よりあつてあつて  
まつむ花の女房例候うといのおねとひひたり  
あひくあひくううぬ声そつらつらとあつてあつて

鎌合の時梅と毒の女中秋中云の四方あ方  
はてをくふあくそひく

右小口一

おねの命婦

大郎の内侍の子け

中ねの命婦

三浦の命婦

おねの中ね

女門齒

棟末小  
三也

松風毫

右小口一信の鎌合の時の世おははれた大郎よりあつてあつて

そめめ鎌合の時江徹殿の女中後鎌合の四方  
右方よてをくふあくそひく

右小口一

右小口一

舟倉院より初の鎌合の時梅と毒の女中  
四鎌をくせまふ世おははれた大郎よりあつてあつて

大井の空の御う人推

昭石上の母君の四世又中務の文の御もひ  
大井の空の御うの空の御うの御う

改申お

源氏右衛門の御代の日車のありにのせ  
まひ一人

三浦守

右小舟

藤人の舟

口一時に冷泉院より四世小舟一人

右大舟

口一時に利のよのすこくとすこくとすこくと  
一人がまひたら人のよ一人

藤雲巻

中舟の舟

安上の舟房安上の舟の御代の御代  
口と源氏右衛門の御代より四世一人

傍船

け入の文の御代のの御代のの御代より  
口と源氏右衛門の御代より四世一人  
口と源氏右衛門の御代より四世一人

朝鳥巻

室巻

権無舟の舟房源氏右衛門の御代より四世一人  
口と源氏右衛門の御代より四世一人

源内舟の舟

右舟房をま  
かひり

とてあま





うらこ

おきき君の女房 柏木君の女房 君小けり  
———  
———

右近

今八女房君の女房  
夕新巻にん

常夏巻

常夏巻

おききの君

おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人

おききの君

おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人

おききの君

おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人

おききの君

おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人

おききの君

おききの君

おききの君

おききの君

おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人  
おききの君の女房の住いしき人

右近 おきつねの女三つ  
夕張まきよるん

ゆきつね

宰おの君

秋好中宮の女房ゆきつねの所へた夕張おの君  
ゆきつね

内侍

右小門

右馬助

夕張おの君人ゆきつねの所へた夕張おの君  
ゆきつね

行幸巻

藤人の右馬助

ゆきつねの御所藤人ゆきつねの所へた夕張おの君  
ゆきつね

後袴巻

宰おの君

おきつねの女房

舟のおゆき

右小門へおきつねの御所へた夕張おの君  
ゆきつね

吉本権巻

中ね

おきつねの御所藤人ゆきつねの御所へた夕張おの君  
ゆきつね  
又おきつねの御所へた夕張おの君ゆきつねの御所へた夕張おの君  
ゆきつね  
又おきつねの御所へた夕張おの君ゆきつねの御所へた夕張おの君  
ゆきつね









中納言の君 保良君の思ひ人  
尋ねたまふ

中納言の君 上小町  
美まきにも

白文巻

紅梅巻

竹川巻

事おの君

あつらひ君の女房 薫君小町うてえはやく白ひ  
まきやうやくふふふふふふふふふふふふふふふふ  
君と花のうらみひふふふふふふふふふふふふふふ  
右うて右方あり 咲とてふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

女房

名はえふ君の女房 薫君の女房 薫君の女房 薫君の女房  
うやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

大浦君

女房

口ー中君の女房 花のうらみひのうらみひのうらみひ  
うやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう  
口ー右方の女房 薫君の女房 薫君の女房 薫君の女房  
うやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう  
中君のうらみひのうらみひのうらみひのうらみひのうらみひ  
うやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

あはれ

中納言の君

女房

口ー中君の女房 薫君の女房 薫君の女房 薫君の女房  
名はえふ君の女房 薫君の女房 薫君の女房 薫君の女房  
竹川のうらみひのうらみひのうらみひのうらみひのうらみひ  
てはえ君とあはれふふふふふふふふふふふふふふ

橋姫巻

うらみひの十帖

宇治の阿闍梨

宇治の八雲の法師後律師小あつこめうらうら  
ひあつたらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
あつこくつひて世淨をくきこめうらうらうらうら  
まに今、律師小あつこめうらうら推印を徳角寺に奉りて  
まゝに候

殿ぬ人

口一雲の侍名うらうら奉りて宇治小あつこめ  
とうらうら殿ぬ人のまじりてあつこくめうら  
はあつこくめうらうらにまじりてあつこくめうら  
ひうらうらうら殿ぬ人小中の若殿へあつこくめうら  
若ぬりにうらひけうらの殿ぬ人あつこくめうらうら  
奉りてあつこくめうら殿ぬ人の方へあつこくめうら  
人

た迫ぬ人

権本巻

一人

白文の由文持く宇治の一人あつこくめうら  
あつこくめうらうらうらあつこくめうらうら

宇治の阿闍梨

宇治八雲の法師  
後律師小あつこ

徳角寺

とつらハ

あつこくめうら宇治の中若へ白文の由文持て  
あつこくめうら

申文を更

白文宇治の由文持てあつこくめうら  
あつこくめうらあつこくめうらあつこくめうら  
あつこくめうらあつこくめうらあつこくめうら  
あつこくめうらあつこくめうらあつこくめうら

宇治の阿闍梨

あつこ

早瀬巻

宇治の申君の女房

名はつと申君ニ奉侍しつらぬり内車  
にのまてしりて候ふに候ふに候ふに

~~~~~人

宇治の殿の人

格取まに  
いひ

事生巻

上野の女

所又治よりか〜申君より〜〜〜級上  
に候ふに候ふに候ふに候ふに

右京女

白雲の侍の御書

あふ〜傍那

申君より〜〜〜申君より〜〜〜申君  
より〜〜〜申君より〜〜〜申君

梅桑の君

梅桑の君の御書

申君の女房

二人若くして梅桑の申君と道存より申  
桑に〜〜〜申君より〜〜〜申君  
〜〜〜申君より〜〜〜申君  
〜〜〜申君より〜〜〜申君  
〜〜〜申君より〜〜〜申君  
〜〜〜申君より〜〜〜申君

おねの君

申君の女房申君の御書

まき

梅桑御書治の〜〜〜申君の御書  
時より〜〜〜申君より〜〜〜申君

宇治の御書

格取まに  
いひ

申君の御書

格取まに  
いひ

東屋巻

常陸のこの娘うめのや

あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり

源少納言

常陸のこのこ  
父娘もあ

後侍

右小日

ま

中志保く——  
あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり  
あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり  
あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり

年志けつ

あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり

侍

あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり

殿お人

あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり

侍従

あまのこころの娘とらふた道あふのよさ  
あり

少納言

中志保く

中志保く

後侍

浮舟巻

大内記及定

即初少瀬と名の書名の歌百大内大浦仲信の  
むらさきさゆらして白雲にまじりて

ふしうへ入白雲思ひくさるるの歌におはし

浮舟あふまゆひ一葉の舟一木の前より

内記の歌うの歌とあはれなり

白雲は舟を果しむるひの国備

舟すらすあひておはせしを家の音と

時をさくしひか

書名の歌はあはれ白雲の舟は

せられし使とて

白雲の舟を果しむるひの国備

舟すらすあひておはせしを家の音と

男

内記

内舎人

書名の歌はあはれ白雲の舟は  
の歌の歌の人

右近大史

右近大史

ま

中記の書は舟を果しむるひの国備  
舟すらすあひておはせしを家の音と

かぬの歌

中記の歌は  
舟すらすあひておはせしを家の音と

浮舟巻

女

浮舟あふまゆひ一人を果しむるひの国備  
舟すらすあひておはせしを家の音と

今よの舟の歌はあはれ白雲の舟は

舟すらすあひておはせしを家の音と

小室お君

大郎

兼隆の女との女房兼隆の女房

大納言

今上の女房兼隆の女房

兼の女房

日一女の女房兼隆の女房

中納言

右の女房兼隆の女房

女

日一女の女房兼隆の女房

女

兼隆の女房兼隆の女房

右を女房

兼隆の女房

内舎人

兼隆の女房

宇治の河原

今、律師小あつち

兼隆

兼隆の女房

兼隆の女房

室より

兼隆の女房兼隆の女房

侍二人

横川の侍の女房兼隆の女房

侍

兼隆の女房兼隆の女房

兼隆の女房

二の

兼隆の女房

夏中納言

少中の尾君の舞の中納言の如し一糸夏中納言  
のほろろしたたけはひまふりあはれを  
とらまうたふらふら河海小夏中納言ハ舞臺君の  
とき後ともき方て納言のよう月おはほせりた  
つあつあつとてくぬハ河海の泣語ひと

大納言

少中の尾君の仕ひ人どもかき人とも

主君

口一あのまらハ

主殿

口一あの仕ひ人のゆらけとらつとらつ  
てとらつとらつ

夏中納言

廿二日の廿五  
日終るに由

夏中納言

